

平成24年度第2回河川工作物アドバイザー会議論点等整理

- 1 羅臼川砂防ダム改良工事終了に伴う今後のモニタリング等について
- ※上流部の盛土部分や河床の土砂等を動かした箇所については、工事完成後、元あった状態に戻した上で、今後モニタリングで土砂の変遷を観察していきたい（H24第1回AP事務局発言）。
 - ※魚道機能確認実験（1/5模型）の結果問題はないと考えているが、今後モニタリングを続けていきたい（H24第1回AP事務局発言）。

（H24第2回AP論点）

- カラフトマスの調査期間については良いが、シロザケについては、水温の低下による遡上、産卵域への影響や11月下旬以降の2番目の遡上ピーク時期を考慮すると、1月中旬位までモニタリング調査をした方が良いため、検討して欲しい。
- 砂防ダム上流部の河床高は今のところ収束しているように見えるが、今後、注視していくことが必要。
- 産卵環境のデータを押さえるため、調査区間内の淵の深さを調べることも検討して欲しい。

【関連】5号床止工（平成24年に落差が生じてサケ科魚類の遡上が阻害）の改修工事に当っては委員のアドバイスを受けて適切に処理すること。

- 2 チエンベツ川の魚道内でのシロザケの停滞について
- ※今年度調査で始めて魚道内でのシロザケの停滞が認められた。停滞確認後の次回調査では、上流への遡上等の痕跡が見受けられない状態であった。
 - ※シロザケにとって、魚道の構造上の問題（流形の影響）や低水温の影響等が考えられる。

（H24第2回AP論点）

- 改良後間もないこともあり、今後はモニタリング等推移を見守ることで確認。

- 3 サケ遡上等に関する長期モニタリングの調査結果について
- ※ルシャ川においてカラフトマスの遡上数に比べ、産卵床数が少ない結果となっている。遡上数の昼夜比の再検討が必要。
 - ※産卵床数が少ない理由としては、ヒグマによる捕食（ルシャ川河口部には少なくとも43頭の出没を確認）による影響も要因の一つと考えられる。
 - ※ルシャ川の産卵床調査区間の第3堰堤上～2300m地点における今年度の産卵床密度は、過去のデータ（横山ら2010）と大きな差異がある。環境が変わった可能性もあり、産卵環境という面からもルシャ川をしっかりと見ていく必要がある。

(H24 第2回AP論点)

- 昼夜比の誤差解消のため予算上可能であれば、イワウベツ川でカラフトマスの夜間遡上数調査を実施したい(事務局)。
- 産卵床数の調査区間別密度については、過去のデータと比較できるように検証を実施。

- ・H25 調査では、ルシャ川において超音波音響カメラを使用した24時間連続遡上調査を実施中(9月に2回)。

4 グレーダムの今後の取り扱いについて

- ※改良が適当と評価された5河川13基の改良の終了と総括的な取りまとめ踏まえ、グレー(改良に伴う防災機能等への全体的な影響が大きいことから現状維持)と評価されている河川工作物の取り扱いについての検討が必要。

(H24 第2回AP論点)

- 平成25年度よりグレーと評価されている河川工作物の個々のダム等の取り扱いや河川工作物APの今後の方向性等について検討を開始することで確認。

- ・H25 第1回APにおいて、グレーダムの今後の取扱いについて検討を行う。

5 オショロコマ等の調査(長期モニタリング)について

- ※オショロコマ等調査については、10~20河川を対象に、年2~4河川を5年で一巡するような継続的なモニタリング調査が必要(H23 第3回APにおいて谷口・河口オブザーバーより提案)。
- ※これまでの調査の結果、知床半島の西側に若齢級の出現が少ない。要因はダム等の工作物の影響よりも水温によるものが大きいと考えられる。
- ※水温環境を守るため、湧水が発生しやすい間隙水域をどう確保するかも重要。今後の構造物の改良方法にもつながると考える。
- ※対象河川や具体の調査内容については、25年度からの実施に向け、谷口・河口オブザーバーのご意見等を踏まえて原案を作成し、H24 第2回APまでに各委員にメール等で事前照会する。

(H24 第2回AP論点)

- オショロコマ等調査対象河川として39河川を抽出。5カ年で一巡するよう毎年8河川程度を実施。夏季の水温調査は毎年実施。
- オショロコマへの影響(捕食圧や産卵床の掘り返し)が懸念されるニジマスについても注視していく必要がある。

- ・最終的には、過去に調査記録のない河川を除いた36河川を対象にすることとし、水温については毎年度、生息数（オシロコマと他の淡水魚）については5ヵ年で一巡するモニタリング計画とした。今年度は8河川で生息数調査を実施中。

6 第36回世界遺産委員会決議に係る今後の対応について

- ① 決議文「サケ科魚類の移動と産卵の状況のモニタリングを継続」について
※河川工作物改良効果等を把握するための遡上等モニタリングについて期間延長を事務局が提案し、了承された。
- ② 決議文「サケ科魚類の移動と産卵を確保するために、ルシャ川において、必要に応じて、その他適切な手段を含む河川工作物のさらなる改良を行うことを検討」について

(H24 第2回APまでの論点)

- 24年度のルシャ川の孵化場撤退に際しては、地元漁業者と調整し撤退を決めた。今後、ダムをどうしていくかは、地元の皆さんとの合意形成を求めていくことが必要である。
- 孵化場撤退に伴う稚魚放流停止により、シロザケやカラフトマスの回帰は減少することも考えられるが、これは自然の状態に戻ることであり、世界自然遺産地域の核心地としては望ましい姿である。
- 第1ダムの下流の副堤部分が河床低下している恐れがあるので調査をして欲しい。この部分は深い淵となっており、遡上したシロザケやカラフトマスにとって重要である。しかし、ダムを撤去すればルシャ川で深い淵がなくなる。
- ルシャ川の3つのダムがサケ科魚類の産卵遡上に影響（・ダムが河道を固定し直線化させ、そのため産卵面積が限られ、産卵場所の流速が早すぎる結果となっていること、本来このような扇状地では河道が蛇行しあるいは枝分れし、サケ類の産卵場の面積を広く確保されるはずであるが、ここではダムがそれを阻んでいること、さらにダムが扇状地の端から端まで横断しており、地下深く設置されているため、本来扇状地であれば、伏流浸透水があちこちに出現し、そこがよいサケ類の産卵場になるが、ここではダムにより伏流水が遮断されてしまっていること）を及ぼしていると考えられる。
- ルシャ川の取り扱いは、地元の現場（漁業者）の意見を訊くことが重要。
- 時間をかけながら、地元等との話し合いを深めながら、将来のルシャ川のあり方について検討していくことが肝要。

- ・地元漁業者との意見交換会を25年2月に実施。今後、現地調査・議論などAP委員を含め調整することとした。
- ・漁業者、AP委員との意見交換会を実施予定。

【これまでの河川工作物アドバイザー会議における論点整理の記録】

- 1 河川工作物アドバイザー資料等については、西暦で併記すること。
※過去の資料との比較の意味で、資料等については西暦で併記して欲しい。異動により者が代わる場合は引き継いでいただきたい。

→（継続）引き続き対応

- 2 赤イ川の堆砂の取扱いについてはどうすべきか？
※赤イ川の鋼製えん堤の堆砂は砂質が主であり、自然の推移に任せて堆砂を流すことについて、漁協関係者を含め合意。ただし、スリット化工事に伴って埋まった淵については復元することとし、復元手法を増殖協に相談しつつ検討（23年度第2回AP）。

→その後、北見管内さけ・ます増殖事業協会増川氏と相談した結果、淵が自然に復元する可能性もあることから、当面自然の推移を観察することとした（24年度の対応）。